SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

リメディアル英語教育対象者の自律性についての一考察：外的調整の依らないリメディアル対象者と中級・上級学習者との比較

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大竹, 彩加, 松野, 和子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028803

研究論文

リメディアル英語教育対象者の自律性についての一考察

― 外的調整に依らないリメディアル対象者と中級・上級学習者との比較 ―

大竹 彩加（静岡大学　大学教育センター）
松野 和子（静岡大学　大学教育センター）

要約： リメディアル教育は、学習者がそれまでに身につけておくべき基礎的な学力の定着を図るものである。その対象者は、「単位取得」を目的に授業を受講していることが多く、学習意欲の低さが問題とされ、その解決のために自律性の育成が必要とされてきた。しかしながら、高い学習意欲をもつリメディアル対象者は存在しており、大竹・松野(2021)では、単位取得を伴わない非正規のリメディアル英語科目の受講生を対象に調査を行い、自律的に英語学習に取り組むリメディアル対象者の学習意識の一端を明らかにしているが、彼らが非リメディアル対象者（中級・上級者）と同様の動機の在り方をしているか否かは明らかにされていない。本稿では、大竹・松野(2021)を発展させ、非リメディアル対象の中級・上級学習者と単位取得を伴わない非正規のリメディアル英語科目の受講生の学習意識を新たに比較調査し、リメディアル対象者の自律性についてさらに明らかにすることを試みる。

キーワード: リメディアル英語教育, 自律学習, 外的調整, 同一化的調整, 内発的動機づけ

1. 研究の背景

1.1 リメディアル英語教育における意欲の問題

国際化が進む社会の中で、英語学習への関心は高まるばかりである。大学においても英語は必修科目として設置されていることが多い。しかし、大学全入時代と呼ばれる今日においては、高校以前の英語科目の学習事項を習得しないまま大学へ入学する学習者も少なくない。このような学習者へ補習的に行う教育が、リメディアル教育である(藤田, 2006)。リメディアル英語教育において、しばしば議論されるのが、学習者の意欲の問題である。リメディアル英語教育の対象となる学習者は、英語に対する苦手意識ゆえに学習意欲が希薄であり、英語授業の受講目的を問われた際には「単位取得」を挙げることが最も多いと明らかにされている(高梨, 1991; ペニントン, 2012; 牧野・平野, 2015; 牧野, 2016; 藤田, 2020)。語学学習の成否を左右する要因は様々あるが、そのうちの主な一つは動機づけである(吉田, 2009)。藤田(2020)は、学習動機が「単位取得」のみの状態では、意欲の維持が困難になることを指摘している。このことから、牧野・平野(2015)は、リメディアル教育においては学力向上だけでなく学習意欲を高める取り組みが必要であると述べている。

1.2 動機づけの分類

学習の継続に必要な意欲を支える動機づけの分類に関しては、Gardner and Lambert (1972)が先駆的であり、目標言語を話す人々の文化に親しみ、馴染みたいという統合的動機づけと、試験や就職などのために

学びたいという道具的動機づけの 2 種類があると提唱した。Gardner らの分類は、動機づけ研究において長らく重用されたが、その後により広い枠組みである心理学に基づく新たな分類を示した Deci and Ryan (1985) の自己決定理論が、外国語学習の動機づけ研究で援用されるようになった(吉田, 2009)。

自己決定理論は、人間の活動において「自己決定すること（自律的であること）が高いパフォーマンスや精神的な健康をもたらすとする理論」(鹿毛, 2012) であり、動機づけをまずは大きく 2 種類に分類している。その一つが、その行為そのものに興味や関心があることから高められる内発的動機づけである。英語学習で言えば、英語自体が好きで面白いから勉強する、というものである。一方で、もう一つの動機づけは、その行為とは別の目的の遂行を目指すことで高められる外発的動機づけである。これは、例えば、「英語の資格試験に合格したい」「就職に役立てたい」といった場合の動機づけといえる。自己決定理論では、外発的動機づけを自律性の観点から 4 段階に分けており、もっとも自律性が低いものから「外的調整」、「取り入れ的調整」、「同一化的調整」、「統合的調整」と名付けられている(鹿毛, 2013)。

外発的動機づけの各段階について、鹿毛(2012) は「外的調整」を報酬の獲得や罰の回避、そして外的な強制に基づく動機づけ、「取り入れ的調整」を恥ずかしさや義務感、不安などの内的な負の感情の回避に基づく動機づけ、「同一化的調整」を自身にとっての行為の価値を認めることに基づく動機づけ、「統合的調整」を行為が自分の価値観と一致し、違和感なく受け入れている状態の動機づけであるとしている。

「単位取得」を目的に学習をする場合、「単位」は報酬に相当し「外的調整」による動機づけを持っているといえる。そのため、「単位取得」を英語授業の受講目的としている多くのリメディアル対象者は、自律性のもっとも低い動機づけに支えられているために、意欲が希薄であり、継続した学習や学力の向上を目指しにくい状況になっていると考えられる。

1.3 習熟度による動機づけの比較

リメディアル教育の対象者は、学び直しが必要ということから習熟度が低い学習者と視点を変えて表すこともできるが、習熟度と動機づけの関連を調査した高梨(1991)では、Gardner and Lambert (1972)の枠組みを利用して、習熟度の高い学習者は統合型の動機づけを持つ者が多く、習熟度が低い学習者では道具型、つまり Deci and Ryan (1985)の自己決定理論では「同一化的調整」に相当する動機づけを持つ者が多いと明らかにしている。また、習熟度別の学習意識を調査した工藤(2009)では、英語の習熟度の高い学習者が「コミュニケーション能力が身につく授業」を多く希望するのに対し、習熟度の低い学習者は「入試に役立つ授業」を求めることを明らかにしている。一方で、加賀田・小磯・前田(2007)では、習熟度の高い学習者が、初級・中級レベルの学習者と比較して「同一化的調整」に相当する動機づけが高いとの調査結果を示している。加えて、古家・櫻井(2014)では、「英語で実現できたら良いこと」に関して、習熟度に関わらず、「コミュニケーションを図りたい」という希望が同程度に学習者の中にあることが示されている。このように、習熟度と学習意識や動機づけの関連については、先行研究で複数の見解がある。

リメディアル教育の対象となる学習者はその意欲の低さが問題とされており、これに対処するため、授業内容の工夫によって改善を試みた実践が報告されている(渡部, 2008; 山岡, 2012; 牧野, 2013)。このように、リメディアル対象者は、学習する上で必要な意欲を拡充されるべき存在として言及されることがほとんどであるが、一部では、リメディアル対象者であっても、英語学習に積極的な姿勢を見せる学習者も確認され始めている(牧野, 2016)。大竹・松野(2021)は、意欲的なリメディアル対象者に着目して、単位の出ない非正規のリメディアル英語科目を自発的に受講する学習者を調査対象とし、単位という「報酬」がな

いにも関わらず、自律的に学習に臨む学習者の学習意識を調査した。質問紙による調査の結果、非正規科目を受講したリメディアル対象者は、受講しなかったリメディアル対象者と比較して外発的動機づけの「同一化的調整」が高いことが明らかとなり、「同一化的調整」がリメディアル対象者を自律的学習に促していると考えられた。この結果は、高梨(1991)や工藤(2009)の習熟度が低い学習者の結果と合致する。

学習の動機づけとしては「内発的動機づけ」を高めるのが良く、外発的動機による動機づけは好ましくないとする見方が長らく教育分野を席巻してきた(上淵・大芦, 2019)。しかし、この見方に対し、日本の学習者の場合は EFL 環境で英語を学ぶ場合がほとんどであり、動機づけが真に内発的になる可能性は高くなく、外発的な動機づけのままで学ぶことが多いことを指摘し、外発的動機づけが学習成果への貢献度において内発的動機づけに完全に劣るかに疑問を呈する声がある(吉田, 2009)。また、櫻井(2009)では、学習効果には外発的動機づけの中で 2 番目に自律性の高い「同一化的調整」が、より自律性が高いとされる統合的調整や内発的動機づけよりも関連性があることが述べられている。これは、「就職」などを見据えて学習を行う「同一化的調整」の方が、当座の楽しみとして学習を行う「内発的動機づけ」よりも未来に意識が向いているからだという(櫻井, 2009)。大竹・松野(2021)において、非正規の英語科目を自発的に受講した学習者は、EFL 環境で英語を学ぶリメディアル対象者として、自律的学習を促す最適な動機づけを有していたために自発的に学習が行われたと考えられる。しかしながら、自発的なリメディアル対象者の学習動機が、彼らが目指す先にいる中級・上級学習者の学習動機と同様の在り方をしているかは明らかになっていない。

リメディアル対象者の自律学習を促し習熟度を向上させる糸口を探る基礎的な知見の 1 つとして貢献することを目的とし、本研究は、リメディアル対象でありながら意欲的に学習を行う学習者の自律性をさらに解明するため、単位の出ない非正規の英語科目を受講したリメディアル対象者と、リメディアル対象ではない中級・上級学習者の英語学習に対する意識を比較し、英語学習者の学習動機の在り方を調査する。

2. 調査課題

本研究では、大竹・松野(2021)を発展させ、中級学習者や上級学習者と比較しつつ、単位取得を伴わない非正規のリメディアル英語科目を自発的に受講した学習者（以下、自発的なリメディアル学習者）における学習意識を調査することによって、外的調整に依らない学習を選択するリメディアル対象者の学習動機を明らかにすることを試みる。本研究は、大竹・松野(2021)に準じ、以下の 4 点の課題に焦点をあてて英語学習に対する意識を調査する。

1. 高校以前の英語学習に対して、どのように自己を認識しているか。
2. 大学において、英語の授業を受講する目的は何か。
3. どのような姿勢で英語学習と向き合っているか。
4. 英語の授業において、どのように英語を学びたいと思っているか。

3. 調査方法

3.1 調査参加者

本研究の調査参加者は、日本語を母語とする英語学習者 100 名であり、日本の大学で学ぶ EFL 環境の大学生である。本研究では、調査参加者の習熟度を測定する基準として The Test of English for International Communication の Listening & Reading test（TOEIC L&R）を採用した。TOEIC 500 点未満を対象とした非正規のリメディアル英語科目を自発的に受講した学習者（自発的なリメディアル学習者）は 33 名であり、TOEIC L&R スコアは 310 点～495 点（$M = 393.03$, $SD = 50.48$）であった。本研究では、リメディアル学習者と比較する中級学習者と上級学習者について、TOEIC L&R 500 点台の学習者を中級学習者、TOEIC L&R 600 点以上の学習者を上級学習者とする。中級学習者に分類された調査参加者は 37 名（TOEIC L&R スコア: 500 点～595 点（$M = 543.95$, $SD = 28.90$））であった。また、上級学習者に分類された調査参加者は 30 名（TOEIC L&R スコア: 600 点～850 点（$M = 687.33$, $SD = 70.94$））であった。

3.2 調査手法

本研究では、大竹・松野 (2021)に準じ、質問紙に基づいて調査を実施した。2021 年度後期に筆者の担当する英語授業内で Microsoft Forms による質問紙調査を行った。質問紙の冒頭には、「回答内容が個人を特定しない形で処理されること」、「研究目的以外で公表されることはなく、公表の際も個人を特定できないようにすること」、「回答内容が成績に影響することは一切なく、回答自体も任意であること」が明記された。これらに同意した学生のみが無記名で質問紙調査に参加した。

質問紙における調査項目は、牧野・平野 (2015)と藤田 (2020)を参考に大竹・松野 (2021)で作成したものを一部改変して利用した。質問項目は、回答者の基本情報に加え、「1．高校以前の英語学習に対する意識」、「2．英語授業全般の受講目的」、「3．英語学習に対する姿勢」、「4．英語授業で希望する学び」という 4 つに分類されるものである。回答には、1 (全くそう思わない)から 4 (とてもそう思う) までのリッカートスケール 4 件法を用いた。大竹・松野 (2021)と同様に、ドルニェイ (2006)に基づき、回答者が安易に中央の数値を選択することを防ぐため偶数とした。「2．英語授業全般の受講目的」、「4．英語授業で希望する学び」の 2 つのセクションの末尾には自由回答欄を付した[1]。回答者の基本情報に関しては、学部や学年、英語資格試験の取得点や級、海外渡航歴について問う内容とした[2]。

3.3 データ分析方法

本調査では、「1．高校以前の英語学習に対する意識」、「2．英語授業の受講目的」、「3．英語学習に対する姿勢」、「4．英語授業で希望する学び」を分析するため、自発的なリメディアル学習者、中級学習者、上級学習者ごとに、それぞれの設問に対する平均値、標準偏差、95%信頼区間を計算した。また、「自発的なリメディアル学習者」「中級学習者」「上級学習者」間に有意な差があるかを分析するため、クラスカル・ウォリスの検定を行った。有意な差がある場合、Dunn 検定（Bonferroni の調整）によって、どのクループ間に差があるかを分析した。

4. 結果と考察

4.1 高校以前の英語学習に対する意識

表 1 は、「高等学校以前の英語学習に対してどのように自己を認識しているか」について調査した結果である。クラスカル・ウォリスの検定によって分析した結果、すべての設問に有意な差がみられた（全設問の一覧は付録を参照）。

表 1「高校以前の英語学習に対する意識」における平均値、標準偏差、95%信頼区間、クラスカル・ウォリスの検定の結果

	自発的なリメディアル学習者			中級学習者			上級学習者				
	M	*SD*	95%CI	*M*	*SD*	95%CI	*M*	*SD*	95%CI	*H*(2)	*p*
設問 1	2.52	0.97	[2.17, 2.86]	3.11	0.81	[2.84, 3.38]	3.23	0.86	[2.91, 3.55]	10.587	<.01
設問 2	2.91	0.77	[2.64, 3.18]	3.51	0.56	[3.33, 3.70]	3.43	0.68	[3.18, 3.69]	14.224	<.01
設問 3	2.64	0.96	[2.30, 2.98]	1.86	0.67	[1.64, 2.09]	1.67	0.71	[1.40, 1.93]	19.525	<.01
設問 4	1.61	0.56	[1.41, 1.80]	2.30	0.74	[2.05, 2.54]	2.63	0.67	[2.38, 2.88]	30.150	<.01
設問 5	2.03	0.73	[1.77, 2.29]	2.68	0.63	[2.47, 2.88]	2.83	0.70	[2.57, 3.09]	19.192	<.01
設問 6	2.70	0.98	[2.35, 3.05]	2.27	0.84	[1.99, 2.55]	1.80	0.71	[1.53, 2.07]	14.203	<.01

表 2 は、アルファレベルを .017(0.05/3)とした Dunn 検定（Bonferroni の調整）によって、グループごとの差を分析した結果である。

表 2　表 1 に基づく Dunn 検定（Bonferroni の調整）の結果

	リメディアル学習者 vs 中級学習者		リメディアル学習者 vs 上級学習者		中級学習者 vs 上級学習者	
	H	*p*	*H*	*p*	*H*	*p*
設問 1	−16.747	.011	−21.114	.002	−4.367	.519
設問 2	−21.777	.000	−19.606	.003	2.171	.734
設問 3	22.034	.001	28.885	.000	6.850	.310
設問 4	−24.236	.000	−35.715	.000	−11.479	.079
設問 5	−21.364	.001	−27.797	.000	−6.428	.327
設問 6	11.905	.071	26.126	.000	14.221	.035

すべての設問において、上級学習者と中級学習者では有意な差がなかった。設問 1（「中学校の英語授業ではつまずくところはなかった」）、設問 2（「中学校までの英語学習内容は修得できていると思う」）、設問 4（「高校の英語授業ではつまずくところはなかった」）、設問 5（「高校までの英語学習内容は修得できていると思う」）では、リメディアル学習者と中級学習者、リメディアル学習者と上級学習者の間に有意な差があり、上級学習者や中級学習者に比べて、リメディアル学習者は中学校や高校の英語授業でつまずくところがあり、中学校や高校までの英語学習内容を修得できていないと感じていることが分かる。また、設問 3（「中学校のときから英語学習は苦手だ」）においても、リメディアル学習者と中級学習者、リメディアル学習者と上級学習者の間に有意な差があり、上級学習者や中級学習者に比べて、本研究で対象としたリメディアル学習者は、中学校の頃から既に英語学習に苦手意識を抱いていることが分かる。一方、設問 6（「高校の時から英語学習が苦手になった」）については、リメディアル学習者と中級学習者には有意な差がなく、リメディアル学習者と上級学習者に有意な差がみられた。中級学習者も高校の時から英語学習に苦手意識を持ち始めていると考えられる一方で、上級学習者は高校においても英語学習に苦手意識がなかったと考察し得る。リメディアル教育において、その対象者の抽出は困

難な点の 1 つだと考えられるが、本研究で対象とした中級学習者と上級学習者では習熟度が異なるにもかかわらず中学校での学習における意識は相違がなく、リメディアル学習者のみ中学校における学習への意識が異なっていたことから、学習者自身の内省の観点からも適切にリメディアル教育の対象者を抽出していると考えられる。

4.2 英語授業の受講目的

表 3 は、「大学において、英語の授業を受講する目的は何か」について調査した結果である。クラスカル・ウォリスの検定によって分析した結果、設問 7「海外旅行で日常会話ができるようにするため」のみに有意な差がみられ、その他の設問に有意な差がなかった。

表 3 「英語授業を受講する目的」に対する平均値、標準偏差、95%信頼区間、クラスカル・ウォリスの検定の結果

	自発的なリメディアル学習者			中級学習者			上級学習者				
	M	*SD*	95%CI	*M*	*SD*	95%CI	*M*	*SD*	95%CI	*H*(2)	*p*
設問 1	3.21	0.56	[3.02, 3.41]	3.24	0.68	[3.02, 3.47]	2.93	0.69	[2.68, 3.19]	3.883	.143
設問 2	2.48	0.91	[2.16, 2.81]	2.59	0.87	[2.31, 2.88]	2.97	0.81	[2.66, 3.27]	5.351	.069
設問 3	3.09	0.77	[2.82, 3.36]	3.32	0.78	[3.06, 3.59]	3.17	0.70	[2.91, 3.43]	2.370	.306
設問 4	2.12	0.96	[1.78, 2.46]	2.05	0.82	[1.78, 2.33]	2.30	0.88	[1.97, 2.63]	1.369	.504
設問 5	2.67	1.05	[2.29, 3.04]	2.38	1.11	[2.01, 2.75]	2.37	0.93	[2.02, 2.71]	1.698	.428
設問 6	3.64	0.49	[3.46, 3.81]	3.35	0.72	[3.11, 3.59]	3.47	0.78	[3.18, 3.76]	2.813	.245
設問 7	2.85	0.83	[2.55, 3.14]	3.14	0.79	[2.87, 3.40]	3.37	0.67	[3.12, 3.62]	6.559	<.05
設問 8	3.06	0.70	[2.81, 3.31]	3.16	0.83	[2.88, 3.44]	3.40	0.56	[3.19, 3.61]	3.360	.186
設問 9	2.94	0.75	[2.67, 3.20]	3.00	0.75	[2.75, 3.25]	3.10	0.71	[2.83, 3.37]	0.782	.677
設問 10	3.27	0.67	[3.03, 3.51]	3.35	0.63	[3.14, 3.56]	3.27	0.69	[3.01, 3.52]	0.292	.864
設問 11	3.06	0.70	[2.81, 3.31]	3.16	0.69	[2.93, 3.39]	3.37	0.67	[3.12, 3.62]	3.216	.200
設問 12	3.39	0.56	[3.20, 3.59]	3.57	0.56	[3.38, 3.75]	3.40	0.81	[3.10, 3.70]	1.823	.402
設問 13	3.06	0.75	[2.80, 3.33]	3.16	0.60	[2.96, 3.36]	3.17	0.83	[2.86, 3.48]	0.511	.775

自発的なリメディアル学習者の英語授業を受講する目的は、概して、中級学習者や上級学習者と変わらないといえる。リメディアル学習者において、平均値が 3.00 以上だった設問は、「就職活動時に役立てるため」「将来、国内での仕事で英語を使えるようにするため」「TOEIC や TOEFL、英検などの資格試験対策のため」「海外に限らず、国内でも外国人とコミュニケーションをとるため」「日本語だけでなく英語でも情報収集をできるようにするため」「映画や本、歌、漫画、ドラマなどを英語で理解できるようにするため」「単位を取るため」「研究分野の文献を読めるようになるため」であり、これらが英語授業を受講する動機や英語を学習する動機になっていると考えられる。自発的に学習する動機として、「単位を取るため」という外的調整だけでなく、「就職活動時に役立てるため」「TOEIC や TOEFL、英検などの資格試験対策のため」「日本語だけでなく英語でも情報収集をできるようにするため」「研究分野の文献を読めるようになるため」という将来への備えという「同一化的調整」による外発的動機づけが高いと考えられる。この「同一化的調整」が動機づけになっている点は、上級学習者と中級学習者で有意な差がなかったことから、上級学習者と中級学習者でも同じ傾向だと考察し得る。すべてのグループにおいて、「留学準備のため」「将来、海外で仕事や生活をできるようにするため」に対する数値は低く、自発的なリメディアル学習者だけでなく、上級学習者や中級学習者でも海外志向が高いとはいえな

い一方で、「海外旅行で日常会話ができるようにするため」では、中級学習者や上級学習者に比べて自発的なリメディアル学習者では有意に低く(H = -17.383, p = .011)、自発的なリメディアル学習者は、比較的実現可能な事象に関してさえも海外への志向が低いと考えられる。

4.3 英語学習に対する姿勢

表 4 は、「どのような姿勢で英語学習と向き合っているか」について調査した結果である。クラスカル・ウォリスの検定によって分析した結果、設問 1（「英語は好きだ」）、設問 2（「英語は得意だ」）、設問 6（「自分の英語力は高めることができる」）、設問 8（「英語は難しい」）、設問 9（「授業やその宿題以外で自主的に英語の勉強をしている」）、設問 11（「できれば、英語は避けたい」）、設問 13（「英語学習の方法がわからない」）という 7 項目に有意な差がみられた。

表 4 「英語学習に対する姿勢」に対する平均値、標準偏差、95%信頼区間、クラスカル・ウォリスの検定の結果

	自発的なリメディアル学習			中級学習者			上級学習者				
	M	*SD*	95%CI	*M*	*SD*	95%CI	*M*	*SD*	95%CI	*H*(2)	*p*
設問 1	2.21	0.60	[2.00, 2.42]	3.03	0.73	[2.78, 3.27]	3.30	0.65	[3.06, 3.54]	32.918	<.01
設問 2	1.58	0.56	[1.38, 1.77]	2.38	0.72	[2.14, 2.62]	2.73	0.74	[2.46, 3.01]	35.142	<.01
設問 3	2.33	0.54	[2.14, 2.52]	2.65	0.68	[2.42, 2.87]	2.63	0.67	[2.38, 2.88]	5.789	.055
設問 4	2.27	0.52	[2.09, 2.46]	2.16	0.60	[1.96, 2.36]	2.30	0.75	[2.02, 2.58]	1.079	.583
設問 5	3.03	0.53	[2.84, 3.22]	3.16	0.69	[2.93, 3.39]	3.20	0.66	[2.95, 3.45]	1.913	.384
設問 6	2.97	0.64	[2.74, 3.20]	3.22	0.53	[3.04, 3.39]	3.40	0.50	[3.21, 3.59]	7.988	<.05
設問 7	3.58	0.50	[3.40, 3.75]	3.65	0.48	[3.49, 3.81]	3.70	0.47	[3.53, 3.87]	1.061	.588
設問 8	3.39	0.66	[3.16, 3.63]	3.03	0.44	[2.88, 3.17]	3.03	0.77	[2.75, 3.32]	9.430	<.01
設問 9	2.06	0.61	[1.84, 2.28]	2.57	0.69	[2.34, 2.80]	2.83	0.91	[2.49, 3.17]	14.406	<.01
設問 10	3.00	0.66	[2.77, 3.23]	2.97	0.73	[2.73, 3.22]	3.07	0.58	[2.85, 3.28]	0.241	.887
設問 11	2.39	0.86	[2.09, 2.70]	2.08	0.89	[1.78, 2.38]	1.80	0.76	[1.52, 2.08]	7.050	<.05
設問 12	1.73	0.45	[1.57, 1.89]	1.62	0.59	[1.42, 1.82]	1.43	0.50	[1.25, 1.62]	5.175	.075
設問 13	2.82	0.68	[2.58, 3.06]	2.24	0.80	[1.98, 2.51]	2.03	0.77	[1.75, 2.32]	17.354	<.01
設問 14	2.91	0.72	[2.65, 3.17]	2.81	0.81	[2.54, 3.08]	2.60	0.89	[2.27, 2.93]	1.666	.435

表 5 は、アルファレベルを .017(0.05/3)とした Dunn 検定（Bonferroni の調整）によって、グループごとの差を分析した結果である。

表 5　表 4 に基づく Dunn 検定（Bonferroni の調整）の結果

	リメディアル学習者 vs 中級学習者		リメディアル学習者 vs 上級学習者		中級学習者 vs 上級学習者	
	H	*p*	*H*	*p*	*H*	*p*
設問 1	−27.968	.000	−37.426	.000	−9.458	.157
設問 2	−26.794	.000	−38.924	.000	−12.131	.066
設問 6	−9.715	.101	−17.564	.005	−7.849	.197
設問 8	17.241	.004	14.494	.020	−2.747	.652
設問 9	−18.292	.004	−24.359	.000	−6.067	.357
設問 11	9.854	.134	18.352	.008	8.497	.208
設問 13	20.018	.002	27.129	.000	7.110	.285

すべての設問において、中級学習者と上級学習者の間には有意な差がなく、中級学習者と上級学習者では、同様の英語学習に対する姿勢を有していることが分かる。一方、表 5 のように、設問 1（「英語は好きだ」）、設問 2（「英語は得意だ」）、設問 9（「授業やその宿題以外で自主的に英語の勉強をしている」）では、中級学習者・上級学習者よりも、自発的なリメディアル学習者ではその意識が有意に低い。自発的なリメディアル学習者に比べて、中級学習者・上級学習者では英語を好み、英語に対する自信が高いことが分かる。また、自発的なリメディアル学習者に比べて、中級学習者・上級学習者では「自主的に英語の勉強をしている」という自己意識も高い。今後は実際の学習時間を調査する必要があるが、学習時間に差がないと仮定すると、中級学習者や上級学習者に比べて、自発的なリメディアル学習者は自己肯定感が低い可能性がある。設問 13（「英語学習の方法がわからない」）では、中級学習者・上級学習者に比べて、自発的なリメディアル学習者では有意に高くなっており、自発的なリメディアル学習者が学習方法に悩んでいる様子がみてとれる。

設問 8（「英語は難しい」）では、自発的なリメディアル学習者と中級学習者との間のみに有意な差があり、リメディアル学習者では英語に対して困難さを感じ、中級学習者となると困難さが低くなるが、上級学習者となっても困難さは軽減されないと考察し得る。設問 6（「自分の英語力は高めることができる」）と設問 11（「できれば、英語は避けたい」）では、自発的なリメディアル学習者と上級学習者との間のみに有意な差があり、上級学習者では自己効力感が高く英語学習を忌避しないことが分かる。忌避感がないことの一因としては、上級学習者では英語学習を行うことが自らの価値観と一致し、違和感なくそれを行うことができる状態（統合的調整）が構築されている為であると考えられる。このように、上級学習者では、習熟度が高いゆえに英語を習得することへの難しさに気づくが、学習すればその困難さを克服できるという意識が高く、逃げずに英語学習を継続するため、習熟度が上がると考え得る。一方、リメディアル学習者の中で自発的な学習意欲が高い者では、第 4.2 節のように英語学習の意義を意識して自発的に学習しようとするものの、英語に対する自信や自己効力感、「英語が好き」という内発的動機づけが低く、できれば英語学習を避けたいという意識があり、そのような意識が英語学習やその定着の妨げになっている可能性がある。

4.4 英語の授業で希望する学び

表 6 は、「英語の授業において、どのように英語を学びたいと思っているか」について調査した結果である。有意な差があった設問は、設問 1（「文法を教えてほしい」）、設問 3（「リーディングを重点的に教えてほしい」）、設問 6（「スピーキングを教えてほしい」）、設問 9（「TOEIC や英検などの資格対策をしてほしい」）、設問 10（「中学校や高校の内容の復習をしてほしい」）、設問 13（「練習問題に取り組みたい」）、設問 18（「歌を聞いたり、歌ったりしたい」）という 7 項目であった。また、有意な差があった設問に対して、アルファレベルを .017(0.05/3)とした Dunn 検定（Bonferroni の調整）の結果が表 7 である。

表 6 「英語授業で希望する学び」に対する平均値、標準偏差、95%信頼区間、クラスカル・ウォリスの検定の結果

	自発的なリメディアル学習者			中級学習者			上級学習者				
	M	*SD*	95%CI	*M*	*SD*	95%CI	*M*	*SD*	95%CI	*H*(2)	*p*
設問 1	3.06	0.66	[2.83, 3.29]	2.70	0.57	[2.51, 2.89]	2.53	0.82	[2.23, 2.84]	9.921	<.01
設問 2	2.91	0.72	[2.65, 3.17]	2.86	0.82	[2.59, 3.14]	2.87	0.86	[2.55, 3.19]	0.005	.997
設問 3	3.39	0.70	[3.14, 3.64]	2.81	0.66	[2.59, 3.03]	2.50	0.68	[2.25, 2.75]	21.927	<.01
設問 4	2.79	0.70	[2.54, 3.03]	2.78	0.67	[2.56, 3.01]	2.67	0.71	[2.40, 2.93]	0.438	.803
設問 5	3.55	0.56	[3.35, 3.75]	3.35	0.72	[3.11, 3.59]	3.30	0.60	[3.08, 3.52]	2.704	.259
設問 6	2.67	0.82	[2.38, 2.96]	3.14	0.75	[2.88, 3.39]	3.10	0.76	[2.82, 3.38]	6.990	<.05
設問 7	2.15	0.71	[1.90, 2.40]	2.49	0.84	[2.21, 2.77]	2.43	0.86	[2.11, 2.75]	3.456	.178
設問 8	2.09	0.77	[1.82, 2.36]	2.51	0.84	[2.23, 2.79]	2.37	0.96	[2.01, 2.73]	4.712	.095
設問 9	3.73	0.45	[3.57, 3.89]	3.11	0.81	[2.84, 3.38]	2.93	0.94	[2.58, 3.29]	16.041	<.01
設問 10	3.00	0.75	[2.73, 3.27]	2.62	0.86	[2.33, 2.91]	2.30	0.79	[2.00, 2.60]	11.494	<.01
設問 11	2.06	0.61	[1.84, 2.28]	2.05	0.71	[1.82, 2.29]	1.80	0.66	[1.55, 2.05]	3.964	.138
設問 12	2.88	0.78	[2.60, 3.16]	2.68	0.75	[2.43, 2.92]	2.53	1.04	[2.14, 2.92]	2.426	.297
設問 13	3.33	0.54	[3.14, 3.52]	2.84	0.60	[2.64, 3.04]	2.90	0.66	[2.65, 3.15]	12.126	<.01
設問 14	2.61	0.83	[2.31, 2.90]	2.27	0.84	[1.99, 2.55]	2.30	0.70	[2.04, 2.56]	3.627	.163
設問 15	2.79	0.70	[2.54, 3.03]	2.70	0.52	[2.53, 2.88]	2.63	0.85	[2.32, 2.95]	0.628	.628
設問 16	2.79	0.74	[2.53, 3.05]	2.76	0.68	[2.53, 2.98]	2.97	0.77	[2.68, 3.25]	1.299	.522
設問 17	2.82	0.85	[2.52, 3.12]	3.22	0.82	[2.94, 3.49]	3.13	0.78	[2.84, 3.42]	4.797	.091
設問 18	2.27	0.94	[1.94, 2.61]	2.11	0.88	[1.82, 2.40]	2.70	0.92	[2.36, 3.04]	6.476	<.05

表 7　表 6 に基づく Dunn 検定（Bonferroni の調整）の結果

	リメディアル学習者 vs 中級学習者		リメディアル学習者 vs 上級学習者		中級学習者 vs 上級学習者	
	H	*p*	*H*	*p*	*H*	*p*
設問 1	14.649	.018	19.458	.003	.4.808	.449
設問 3	20.537	.002	31.236	.000	10.699	.108
設問 6	−15.934	.014	−14.136	.038	1.797	.787
設問 9	20.713	.001	24.758	.000	4.045	.538
設問 10	12.778	.050	23.230	.001	10.452	.119
設問 13	19.828	.001	17.314	.007	−2.514	.687
設問 18	4.893	.452	−11.842	.084	−16.735	.012

設問 3（「リーディングを重点的に教えてほしい」）、設問 9（「TOEIC や英検などの資格対策をしてほしい」）、設問 13（「練習問題に取り組みたい」）では、中級学習者・上級学習者に比べて、自発的なリメディアル学習者では有意に高かった。加えて、設問 1（「文法を教えてほしい」）、設問 10（「中学校や高校の内容の復習をしてほしい」）では、上級学習者に比べて、自発的なリメディアル学習者では有意に高く、自発的なリメディアル学習者では、資格対策を行いたいと考えており、英語学習を楽しむというよりは、実利的な動機が高く、練習問題や文法学習を厭わず取り組もうとしている様子が推察できる。また、自発的なリメディアル学習者では、自身の習熟度を認識し、中学校や高校の内容の復習をしたいと考えていることも分かる。大竹・松野（2021）では、単位取得を伴わない非正規のリメディアル英語科目を受講しない学習者との比較調査を行っているが、このような「自発的ではないリメディアル学習者」では、練習問題や文法学習を厭い、中学校や高校の内容の復習を望まない傾向が示されており、リメディアル学習者の自律性を促す要因として、外的調整だけではなく就職活動等の近い将来に備えようとする意識（同一化的調整）が機能することが本稿でも再確認できる。一方で、「スピーキングを重点的に教えてほしい」（設問

6）では、中級学習者に比べて、自発的なリメディアル学習者では有意に低く、英語によって発話できる力を身につけたいという意識が低いと考えられる。これは、資格試験やその先となる就職への備えという観点からスピーキングに価値を見出していないことの表れである可能性が考えられ、実利的な志向の表れと捉え得るかもしれない。このことから、スピーキングを前面にした英語学習では、スピーキング能力が必要な留学や海外での就職をこの先で想定していないことの多いリメディアル対象者にとって、その学習に利益を見いだせず、自律性を即時的に育むのは困難な可能性がある。スピーキングに対する学習に導いていくには、スピーキング能力向上の実利的な意義を見いださせながら、長期的な視点で漸次的に導いていく必要があると考えられ得る。

このように、自発的なリメディアル学習者では実利的志向が高く、リメディアル学習者を自律的学習に促す動機づけとして同一化的調整が有効であることが分かったが、英語学習への自己効力感や非忌避感が同一化的調整に伴わない場合、目先の実利だけでは、習熟度の長期的な向上へ結びつかないことが考察される。

5. 結論

本研究では、日本語を母語とする英語学習者を対象に、自発的なリメディアル学習者と中級学習者や上級学習者の学習意識を比較調査し、外的調整に依らない学習を選択するリメディアル英語学習者の学習動機を明らかにすることを試みた。「1. 高校以前の英語学習に対する意識」、「2. 英語授業の受講目的」、「3. 英語学習に対する姿勢」、「4. 英語授業で希望する学び」に焦点を当てて調査を行った結果、以下が考察された。

1. 本研究の調査対象者のうち、自発的なリメディアル学習者のみが中学校までの英語学習内容を修得できていないと感じている。中級学習者は高校の時から英語学習への苦手意識を感じ始めており、上級学習者では高校においても英語学習に苦手意識を感じることがなかったと認識している。学習者自身の感覚としての習熟度が、客観的な評価（TOEIC L&R）によるレベル分けと一致する結果となった。
2. すべてのグループで英語授業を受講する目的には概して相違がなく、自発的なリメディアル対象者だけでなく中級・上級学習者も就職活動や英語の資格試験対策、情報収集や研究分野の文献読解のためという将来への備えを意識した「同一化的調整」による動機が高い。また、すべてのグループで海外での留学や就職への意欲は低かったが、自発的なリメディアル学習者では、実現性の高い海外旅行における英語使用にも消極的な内向き志向がみられた。
3. 中級学習者や上級学習者では「英語が好きである」という内発的動機づけが高い一方で、自発的なリメディアル学習者では、内発的動機づけや英語に対する自信・自己効力感が低い。上級学習者では英語に対する自己効力感が高く、「統合的調整」によって英語学習を忌避しない姿勢が明らかとなり、自発的なリメディアル学習者とは真逆の結果となった。
4. 「授業で希望する学び」は、上級学習者や中級学習者と比べて、自発的なリメディアル学習者では文法やリーディング、資格対策や中学校・高校の内容の復習をしたいとの希望が強い。また、自発的なリメディアル学習者はスピーキングを学ぶことには気が進まない。

上記のように、自発的なリメディアル学習者と中級学習者や上級学習者とでは、英語授業を受講する目的に大きな相違はないが、英語に対する意識や希望する学習内容が異なることが明らかになった。大竹・松野（2021）と同様、自発的なリメディアル学習者は「同一化的調整」を動機として、練習問題や文法学習を苦とせず地道な学習に意欲的である一方で、自信や自己効力感が低く、英語学習の方法に苦慮していて、英語を避けられるならそうしたいとの意識も持っている。一方、上級学習者では、「外的調整」や「同一化的調整」だけでなく、「統合的調整」や内発的動機づけも高く、自信や自己効力感が高かったことから、実利的な動機は自律的学習の契機となるが、実利的な動機だけでは、習熟度の長期的な向上につながる意欲づけとしてはあまり機能しない可能性が示唆された。言い換えれば、自律性を促す動機づけの在り方として、単一の動機が存在しているというよりは、複数の段階の動機づけが複合的に作用することによって自律性が維持されると考えられる。

英語に対する意識や動機づけを、上級学習者の状態に近づけることで学力の向上も目指せるとするならば、上記のように、自己効力感の向上や適切な英語学習方法の認知が習熟度向上の鍵となり得る。上級学習者がしているであろうように、リメディアル対象者に対して、実利的なメリットも意識させながら、加えて、自身に適合した学習方法を見いだせる導き、学習上で生じる困難に対して自身で乗り越える成功体験ができる等の自己効力感を育む導き、英語への忌避感覚を減少させるような導きが望まれるようである。

6. 今後の課題

本研究における今後の課題は　4 点である。第一に、調査に使用した質問項目の詳細化が必要である。例えば、学習者の自己効力感に関わる設問 6（「自分の英語力は高めることができる」）の回答から、自発的なリメディアル学習者の自己効力感が上級学習者よりも低いと判明したが、なぜ自己効力感の高低に違いが生じたのか、元々の水準はどのようだったか等の要因を問う必要がある。また、設問 13（「英語学習の方法がわからない」）においても、「色々な方法を試したが合うものが見つからないのか」、「何の方法も試していないのか」あるいは「何らかの方法で行っているが自分に合っているかわからないのか」等、今後はその詳細までが分析できるよう質問紙の改変を行う。第二に、より緻密な考察を行うため、調査対象者における学習の実際の様子を観察・記録する必要がある。設問 9（「授業やその宿題以外で自主的に英語の勉強をしている」）では、中級学習者・上級学習者よりも、自発的なリメディアル学習者ではその意識が低いことが明らかとなったが、中級学習者・上級学習者よりも、自発的なリメディアル学習者では学習時間が実際に少ないかどうかは分からない。今後は、実際の学習の様子に基づき学習意識を考察する。第三に、動機づけを高める具体的な指導方法の提案や開発が必要である。本研究では、自発的なリメディアル学習者の学習意欲を継続させる要因の示唆にとどまり、実際にどのような教育的サポートや授業内容を行うべきかを明示していない。今後は、調査結果に基づいた指導方法の検討を行い、教育現場に貢献できるようにする。第四に、習熟度と意識の関係性をさらに調査する必要がある。例えば、本研究では、上級学習者において、英語学習への自信や自己効力感が高いことが明らかとなったが、自信や自己効力感が元々高い性格の学習者の習熟度が上がるのか、或いは、習熟度が上がったために自信や自己効力感が高くなったのかを明らかにする必要がある。

注

1) 自由記述欄の回答として、英語授業全般の受講目的に対する回答が 1 件あった。1 件のみの回答であるため、本研究の分析対象から除外した。

2) 海外渡航歴に関しては、下記の回答を得た。

学習者の習熟度	国名	期間	滞在時の年齢(または時期)
自発的リメディアル学習者	アメリカ	4 日	17 歳
	アメリカ	5 日	18 歳
	アメリカ（グアム）	2 週間	3 歳
	インドネシア	3 年	11~15 歳
	オーストラリア	1 か月	16 歳
中級学習者	アメリカ	3 日	16 歳
	アメリカ（ハワイ）	4 日	高校 2 年生
	アメリカ	1 週間	16 歳
	アメリカ	10 日	17 歳
	アメリカ	2 週間	16 歳
	アメリカ、	2 週間	12 歳
	オーストラリア	2 週間	15 歳
	オーストラリア	4 日	15 歳
	オーストラリア	2 週間	17 歳
	中国	4 年	小学 2~5 年生
	ネパール	1 週間	14 歳
	フィリピン	2 週間	高校 1 年生
	マーシャル諸島	10 日	12 歳
上級学習者	アメリカ（グアム）	3 日	14 歳
	アメリカ	5 日	記載なし
	アメリカ	6 か月	5 歳
	イギリス	2 週間	18 歳
	イギリス	5 年	記載なし
	オーストラリア	2 週間	15 歳
	オーストラリア	8 日	高校 2 年生
	オーストラリア	2 週間	17 歳
	中国	1 週間	17 歳
	メキシコ	3 年	9~12 歳

参考文献

上淵寿・大芦治 (2019).『新・動機づけ研究の最前線』北大路書房.

大竹彩加・松野和子 (2021). 「外的調整による外発的動機づけに依拠しないリメディアル英語教育―非正規科目の受講を自発的に選択した学習者における学習意識―」『静岡大学教育研究』17, 19-36.

加賀田哲也・小磯かをる・前田和彦 (2007).「英語学習についての調査研究―大学生を対象に」『大阪商業大学論集』*2*(4), 13-32.

鹿毛雅治 (2012).『モティベーションを学ぶ 12 の理論』金剛出版.

鹿毛雅治 (2013).『学習意欲の理論－動機づけの教育心理学』金子書房.

櫻井茂男 (2009).『自ら学ぶ意欲の心理学 キャリア発達の視点を加えて』有斐閣.

高梨芳郎. (1991). 「英語学習における統合的動機づけと道具的動機づけの役割」.『福岡教育大学紀要』*40*, 53-60.

藤田恵里子 (2020).「非英語専攻学習者の英語学習に対する意識調査」『江戸川大学紀要』*30*, 507-515.

古家 聡・櫻井 千佳子 (2014). 「英語に関する大学生の意識調査と英語コミュニケーション能力育成についての一考察」『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』*4*, 29-50.

ペニントン和雅子 (2012).「学習者が大学で『英語』を学習する目的意識の調査報告」『西南学院大学言語教育センター紀要』*2*, 3-19.

牧野眞貴 (2013).「英語リメディアル教育対象クラスにおける授業改善の試みースポーツ推薦入学生クラスの事例報告－」『近畿大学法学』*61*(2・3), 351-367.

牧野眞貴 (2016).「英語学習目的の差に見る学習者の特性について」『リメディアル教育研究』*11*(2), 191-195.

牧野眞貴・平野順也 (2015).「英語リメディアル教育を必要とする大学生を対象とした英語学習意識調査」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要・外国語編』*6*(1), 39-55.

山岡華菜子 (2012).「英語リメディアル教育でのオーセンティック教材の使用」『リメディアル教育研究』*7*, 165-175.

吉田国子 (2009).「語学学習における動機づけに関する一考察」『武蔵工業大学環境情報学部紀要』*10*, 108-113.

渡部友子 (2008).「『中学・高校のやり直し』ではないレメディアル教育　本学での英語教育の実践から」『富山県立大学紀要』*18*, 57-66.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.

Dörnyei, Z. (2003). *Questionnaires in Second Language Research – Construction, Administration, and Processing*. NJ: Lawrence Erlbaum.（ゾルタン・ドルニェイ著、八島智子・竹内理監訳 (2006).『外国語教育学のための質問紙調査入門 作成・実施・データ処理』松柏社.）

Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1972). Attitudes and Motivation in Second Language Learning. Rowley, MA: Newbury House Publishers.

付録 (大竹・松野 (2021) 再掲)

質問紙項目

【1. 高校以前の英語学習】

設問 1　中学校の英語授業ではつまずくところはなかった。
設問 2　中学校までの英語学習内容は修得できていると思う。
設問 3　中学校のときから英語学習は苦手だ。
設問 4　高校の英語授業ではつまずくところはなかった。
設問 5　高校までの英語学習内容は修得できていると思う。
設問 6　高校の時から英語学習が苦手になった。

【2. 英語授業全般の受講目的】

設問 1　就職活動時に役立てるため。
設問 2　将来、海外で仕事や生活をできるようにするため。
設問 3　将来、国内での仕事で英語を使えるようにするため。
設問 4　留学準備のため。
設問 5　院試の受験対策のため。
設問 6　TOEIC や TOEFL、英検などの資格試験対策のため。
設問 7　海外旅行で日常会話ができるようにするため。
設問 8　海外に限らず、国内でも外国人とコミュニケーションをとるため。
設問 9　自分の意見を英語で発信し、より多くの人と共有できるようにするため。
設問 10　日本語だけでなく英語でも情報収集をできるようにするため。
設問 11　映画や本、歌、漫画、ドラマなどを英語で理解できるようにするため。
設問 12　単位を取るため。
設問 13　研究分野の文献を読めるようになるため。
設問 14　その他（自由記述）

【3. 英語学習に対する姿勢】

設問 1　英語は好きだ。
設問 2　英語は得意だ。
設問 3　大学の英語授業は好きだ。
設問 4　大学の英語授業は苦痛だ。
設問 5　英語で良い成績を取ることは自分にとって重要である。
設問 6　自分の英語力は高めることができる。
設問 7　英語ができると将来役に立つと思う。
設問 8　英語は難しい。
設問 9　授業やその宿題以外で自主的に英語の勉強をしている。
設問 10　授業やその宿題以外で自主的に英語の勉強をしたい。
設問 11　できれば、英語は避けたい。

設問 12　英語学習の目的がわからない。
設問 13　英語学習の方法がわからない。
設問 14　単語や文法を覚えるのは面倒くさい。

【4. 英語の授業で希望する学び】
設問 1　文法を教えてほしい。
設問 2　語彙を教えてほしい。
設問 3　リーディングを重点的に教えてほしい。
設問 4　ライティングを重点的に教えてほしい。
設問 5　リスニングを重点的に教えてほしい。
設問 6　スピーキングを重点的に教えてほしい。
設問 7　ペアワーク（2 人でする課題）を入れてほしい。
設問 8　グループワーク（3 人以上でする課題）を入れてほしい。
設問 9　TOEIC や英検などの資格対策をしてほしい。
設問 10　中学校や高校の内容の復習をしてほしい。
設問 11　中学校や高校と同じ方法で英語を教えてほしい。
設問 12　授業は講義形式がいい（先生が話し、学生は聞く）。
設問 13　練習問題に取り組みたい。
設問 14　小テストを実施してほしい。
設問 15　英文を日本語に訳したい。
設問 16　英語の文章を自分のペースで、自由にたくさん読みたい。
設問 17　映画など映像を見たい。
設問 18　歌を聞いたり、歌ったりしたい。
設問 19　その他（自由記述）

【回答者の基本情報】
1. 学部を教えてください。
2. 学年を教えてください。
3. TOEIC や英検などの取得点や級があれば、点数や級を教えてください。
4. TOEIC や英検以外の英語資格の取得点や級があれば、教えてください。
5. 英語圏への海外渡航歴があれば、国名と期間、滞在時の年齢を教えてください。
　※ 複数の渡航歴がある場合は、最長の期間だったもの
6. 非英語圏への海外渡航歴があれば、国名と期間、滞在時の年齢を教えてください。
　※ 複数の渡航歴がある場合は、最長の期間だったもの